

ことし、広島は被爆から70年という節目を迎えます。

忘れてはいけない「あの日」から年月が過ぎるに伴い、高齢化による被爆者の減少が大きな問題になっています。今、ここにいる私たちは被爆者の体験談を聞いてきましたが、近い将来、直接聞けない時代がやってきます。被爆者が生きているうちに、と私たちが住む広島では核兵器廃絶の声を世界に発信し続けていますが、日本政府としては米国の「核の傘」の下から抜け出すことなく、核兵器を容認している矛盾を抱えています。

戦争、核兵器のむごさ、平和の大切さを確かに後世に伝えていくために、私たち市民ひとりひとりが意識して動いていく必要があるのです。

現在、広島での原爆資料館・平和記念公園のガイドはボランティアが担っています。志を持った方が精力的に活動しておられる一方、社会人や学生など若者の参加が時間的、経済的に難しいのが現状です。

また、広島は他地域に比べると平和教育が盛んではありますが、まだまだ、日本が受けた被害についての教育が中心で、加害に十分に触れられていない一面もあります。

そして、私たち若い世代は平和活動に積極的に取り組んでいる人がいる一方、参加しない人や、平和や政治に無関心な人が多くいます。一人ひとりの心の中を考えてみると、よく知らない人に対して勝手な先入観や偏見を持ち、違いを受け入れられず、差別やいじめなどの言動につながっていることがよくあります。

今回訪れたアウシュビッツ強制収容所跡では、音声ガイドでなく、日本人唯一の公認ガイド、中谷剛^{たけし}さんが案内してくれました。ここでは、ガイドは見学者が自分の感情と向き合う手助けをしたり、その場で質問に答えたりする役割を担っていると知りました。アムステルダムの中高生との交流では、中学生から「原爆が投下された責任は日本にあるのでは？」との質問も受けました。日本の加害の面も理解しているつもりだったのに、自分が責められているような感覚になった上、答えを見つけられず、ふがいなさを痛感しました。

また、NPT再検討会議では、NGOセッションという国連の公式行事がありました。市民と政府代表が対等に話し合う姿を見て、NGO、市民の発言力、影響力の大きさを知り驚きました。

これらのことを踏まえて、次のような取り組みをアピールします。

- ・違いを認める…文化、人種、国籍などにとらわれない
- ・想像力を働かせる…自分の言葉や行動で、相手がどうなるかを考える
- ・「ファースト・ペンギン」になる…講演会や授業、話し合いの中で積極的に質問、発言することをためらわない
- ・歴史をさまざまな角度から学ぶ…本や新聞を読み、人の意見を聞いた上で自分で考える
- ・ボランティアをやってみる…社会に参加することにつながっていく
- ・核兵器の現状を知る…若者が関心を持つために。まず、皆さんも今日、帰りに原爆資料館に行ってみてください
- ・ヒロシマを語る人の多様化を図る…社会人や学生など若い人が継続して担える環境づくりと、いろいろな言語で案内できる人材づくりをする

以上です。

未来の平和を築くのは私たちひとりひとりの手にかかっています。

一緒に頑張りましょう。